海蝶ノ〜イ 6

「要救助者役やったら？」に即、断りました

吉川英梨

2019年３月６日、横浜海上防災基地にて海上保安友の会の理事会が行われ、無事、私は新理事の承認を受けました。昼食懇談会ではおいしそうなお弁当が配られたのですが、私の目の前にはあの方がいます。（詳しくは10月15日号をご覧ください）お弁当の味、全くわかりませんでした。

休憩中は当時の岩並秀一長官ともご挨拶させていただきました。身に余る光栄な時間だったのですが、私の視界にちらちらと入るあの方……。その後、宮野直昭常務が間に入ってくださって直接ご挨拶をさせていただきました。小説の中とはいえ全く申し訳ないと平身低頭です。

真面目な話ですが、「小説の中で特殊救難隊のヘリを落としちゃった〜」とヘラヘラと言えるのも、特殊救難隊で墜落事故が実際に起こっていないからとも言えます。これもひとえに隊員の皆さんの日々の努力と訓練の成果。というわけで、無事故祈願を込めて、これからも小説では好き勝手にさせていただこうと思っています（すみません）。

さて、理事会終了後は展示訓練の視察です。まずは、人工波を起こせるＡ水槽にて荒天時吊り上げ救助訓練です。

いまはまだ穏やかな水面のプールに、要救助者役の特殊救難隊員が、しれっと浮かんでいます。見たところ水深２㍍ほどはありそうです。あんなところに着衣のまま浮かんでいること自体、泳げない私にとっては奇跡的なのですが、本番はここから。どこからか、ブウンブウンと不気味な音が聞こえてきます。やがて押し寄せる波がやってきて、水面は大荒れに。

「助けてくれー！」

テレビや映像で何度かこういった訓練を見たことがありますが、間近で見ると「今回ばかりはやばいんじゃないの」と思っ

要救助者を吊り上げ救助した瞬間＝横浜海上防災基地で昨年３月６日

てしまうくらい、波の高さ、水の音、飛んでくる水飛沫が凄まじい。

なにやら頭上から掛け声が聞こえると思ったら、いつの間にか、見上げる高さにある飛び込み台のような場所に別の隊員が立っています。そして躊躇なくドボン！と要救助者の元へ飛び込みました。その時上がった水飛沫が、私や他の理事の方々のところにまで飛んでくる。まだまだダウンジャケットが必要な寒い中、水飛沫が顔にあたったときの冷たさに、私はぞっとしました。

（訓練とは言え、こりゃ凄まじい……）

すでに波の高さは１㍍近くになっています。何度も顔を波に洗われながら、隊員が要救助者に手早く装備品をつけていく。続いて、天井の装置から垂れたロープを使い、もう一人の隊員がリペリング降下してきます。スムーズにロープを送りながら、いとも簡単そうに要救助者の元に到着。今度は天井からウーンと不気味なうなり声が。なんとこのＡ水槽は波だけでなく、ヘリのダウンウォッシュまでも再現できるらしいのです。それまでは上下だけだった波に、今度はダウンウォッシュが作る細かいさざ波が波状に広がっていきます。

浮かんでいるだけでも普通の人では難しい状況で、特殊救難隊の方々はひとつの動作を終えるたびに、かけ声をあげ、ぴしっと腕を伸ばして親指を立て合図を送る。一般人がやろうとしたら「ゴボッ装備、よ、よし、ゴボォゴボ……」となってしまうはず。合図のために振り上げた腕はへなへなで、途端に沈んでしまうでしょう。

プロはすごい。

展示訓練を終えた３人は最後、潜水士特有の拳を左胸に当てるポーズで、

「敬礼！」

その姿の美しさといったら。あれだけのことをしておいて、息ひとつ上がっていない。

圧巻です。「すごいすごい」とはしゃぐ私に、元特殊救難隊の隊長でもあった宮野常務が、「吉川さん、いつか要救助者役やったら？」とおっしゃる。即、断りました。

「私がやったらリアルな救助活動になっちゃいますから」

（つづく）

圧巻の展示訓練「私ならリアルな救助活動になっちゃいます」